

漂流ばなし

梶川 忠成写

資料校正・編修 鶴野博文

(会員佐伯市田の浦)

まえがき

今回は安五郎が役人へ直接一人称で答えたのを想定して現代語訳を試みました。○内は筆者が補った語です。

本文(前号の続き)

ここの海上も四方(見渡す限り)一向に山もありません。(このような状況で)漂流しておりましたところ、(ある)朝、五ツ時(8時)頃、異国の漁船がこちらの船を見つけ、早速伝馬を降ろして乗り付け、この船の表に乗り込んで来まして、倒れている者の鼻へ手を当ててみて息のある(私達)四人の者を異国船へ連れ込みました。(その後から)又、伝馬一艘を乗り付け、四人の荷物等運び入れると、(私達が乗っていた)船は焼き払ってしまった。

異国船の図

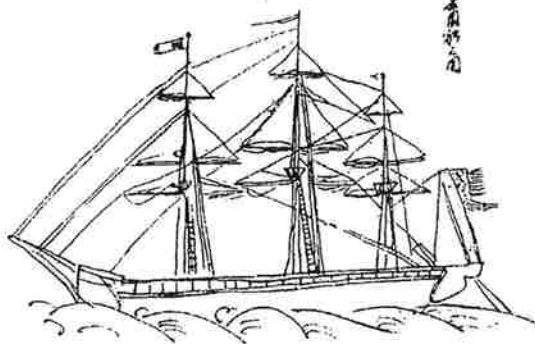
異国船およそ長さ36~7間、巾15~6間ほど。

(約65m×27m位)

船の縁垣は丸さ4寸ほどの鉄で間隔は1尺くらいに建て並べ、内は厚板張り。その他の材木で鉄筋縫いなり。内三階づくり。ごく上に櫓があり表より裏まで通し、櫓木なども楠・榎のような木

でそろえ、柱の根はしつくい漆り、その上をギヤマンで張り、その回りを矢来で囲い、人の寄らないようにしている。

屋根上に一間たらずのギヤマンで張り、明かりを取る。



入口は前に1つ、艀に1つ、中に1つ、立って歩行が自由になっている。

下も板張りで、その下に荷物を入れられるようになっていいる。

総人数39人乗りとのこと。

誠に「九死を出て、一生を保つ」とは、まさに此の事だ、と(つくづく)実感いたしました。

運良く異国船に出会い、助けられたのも(あの漂流中の)信心のお陰もあつたにちがいありません。

(さて異国人たちは)それから私達四人を本船に乗り移らせると、すぐに湯を沸かして、私達の身体じゅうを手足から爪の先までも残るところなく、よくよく念入りに洗ってくれました。

それから焚き火をして、皆が暖めてもらつておりましたら、急に私以外の三人が失神してしまいましたので、異人たちは驚いて、練葉のようなのを水に溶いて、コップで二盃ほど吞ませましたところ、めつきりと気分が直里(なお)りまして、三人は暫く寝入っていました。

それから、眼も少しは見えるくらいに迄もなつてきましたので、そのうち米の粥を炊いて小さな器で二杯ずつ私達に食べさせると、またあの堅い練葉を(水に溶いて)五勺ほど入る器で毎日吞ませてくれました。

その外、種々の介抱によつて十日ほど経ちますと、全く気力が付いてくるようになりました。

ちょうどこの節、異国船中皆が私たちの快氣祝と見え

て、大広蓋おひろがたを出して酒盛りを始めました。

色々の器うつわが並んでどれも美を尽くしておるようでした。多くは銀の皿鉢でその上には生きている(船内に飼育している)豚の料理や、そのほか鶏とか魚類などもたくさんありましたが、煮方は至つて旨く、全員が打ち揃つて酒盛りをいたしました。

こちらの四人を上客として、色々のもてなしをしてくれましたが、(すすめられた)酒は至つてきつく、小さな猪口で一、二盃吞むと、ひよろひよろしてしまいます。

さて此の船ですが漁船で、鯨を追い上げてとるのでうです。

あるとき船中で、鯨を取つたことがありましたが、私たち四人がこの鯨を料理(刺身?)して生のまま食いましたところ、異国人たちは、びつくりあきれておりました。異国人は、何でも生で食することはありません。

異国船の図、そのほか器うつわなどの図は後に委敷あかし出します。船中三十九人乗りで、豚・猪・鶏、そのほか色々の動物を(食料用に)飼育しているそうです。

夫それから異国船はその翌日より三日間帆を揚げ、北国へひた走り、三日目に異国(ここでは異国船の本国)の

(陸地) より、壱里ばかり沖へ碇を下ろし、何人かが伝馬船に乗り移り上陸いたしました。

これは私達日本人四人を救助した理由を報告しに行ったものと思われれます。

【解説三】

小林茂文著「ニッポン人異国漂流記」のなかでは、「漂流記は助かって帰還した人々の記録で……漂流の実数は知られているものの数百倍あったと思われる。」と書かれています。

これから、安五郎の救助率は五百分の一以下だったとも考えられます。ついでに、漂流期間の長い事例として、

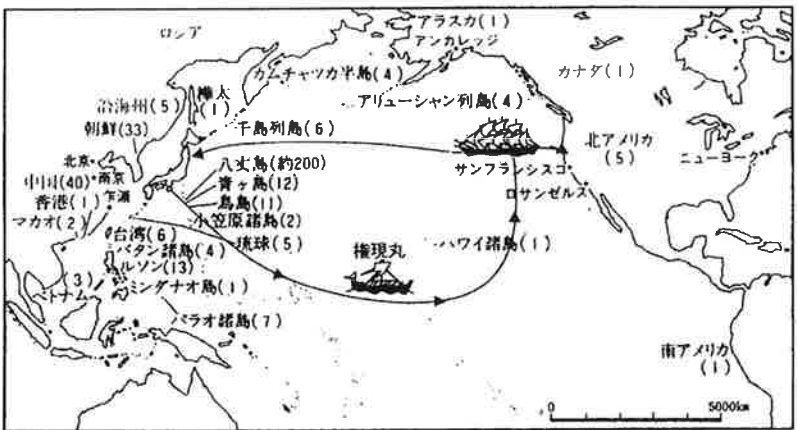
①「督乗丸」484日(1813)千二百石・十四人分の一

②「宝順丸」386日(1832年)千石・十四人分の三

があります。どちらも尾張の船で、②の方は有名な「モリソン号事件」の重要人物である音吉(十四歳)が乗っていました。

次に重要なことは、異国人の「漂流者に対する処遇」です。

安五郎らは、人道的に親切に扱われていますが、当時



近世漂流船の漂着先と件数 漂流して帰還できたもののみを掲げた。漂着先の傾向は読みとれる。(川合彦彦『日本人漂流記』、1967年、をもとに作成)
 ※上図は「ニッポン人異国漂流記」より。但し当権現丸は「近世漂流船一覽」にも記載がない。

(1847年はペリー来航の6年前) 日本に開国通商を迫るアメリカは、インドや中国でのイギリスやフランスの利権獲得成果に大きく後れており、日本人漂流者の救助は勿論、日本人の研究・教育・送還等は重要な国家戦略であり、たくさんの事例もあります。

〔ロシアの日本語学校〕(一七〇五年・宝永)

南方進出が最重要の国家戦略だったので、大坂の漂流民、伝兵衛を手厚く保護、彼を教師に仕立て、日本語学習所を首都ベテルブルグに創設以来、一七二八年、一七四四年と漂流者が増加し日本語教師陣も充実、中でも薩摩のゴンザは十一才で漂流、露日辞典や文法書等で有名。

〔モリソン号事件〕(一八三七年・天保八年)

先述の「宝順丸」は、運悪くインディアンの部落に漂着彼らの慣習により船も人間も戦利品と見なされ没収。音吉ら三人は奴隷にされてしまいますが、後イギリス人船長により買い戻され、マカオへ移されます。

二年後、彼らを送還し、見返りに通商をもとめようとしてマカオを出帆したアメリカ船モリソン号は、武器も積まず大砲なども下ろして、日本に接近、日本人漂流者七人が乗っていることを十分知らせて、上陸許可を待つ

ていると突然、浦賀や薩摩で砲撃され、日本人送還は失敗し、音吉らは帰国を諦め、以後、他の日本人漂流者を帰国させる手伝いをする心を誓ったのでした。

(本文・異国上陸)

陸へ上がり四く五町行くと人家に着き、(その中の)綺麗な家へ三日間逗留しました。しかし三階へ連れて行き、外へは一向に出さず、男女七く八人つつ付けていました。

それから四日目にかなり位の良さそうに見える人が私たちを呼びに参りまして、靴をはかせ馬に乗せ、ここを出ました。途中は大人数で警護しておりました。三日目に都に到着したとき、目が覚めるほど立派でびっくりしました。往来もすべて石畳でできています。

一、壁は石で畳み(積み)上げギヤマン(ガラス)を留めてある箇所や、また板壁のところもあります。

屋根も石を重ね、壁の引き窓のようなところはガラス張りで、その外の窓も同じです。ここは至って寒国なので土を塗って(使い)障子などを用いては雪の季節になればとても保てないからでしょう。ほぼ日本の石蔵のようなものです。

一、酒は至ってきつく色は清んでいます。米(粒)は少し大きく、前の日からかしておき、三合で一升くらいに炊き上がります。でも炊き上がるまでに水を三度ほど追加します。

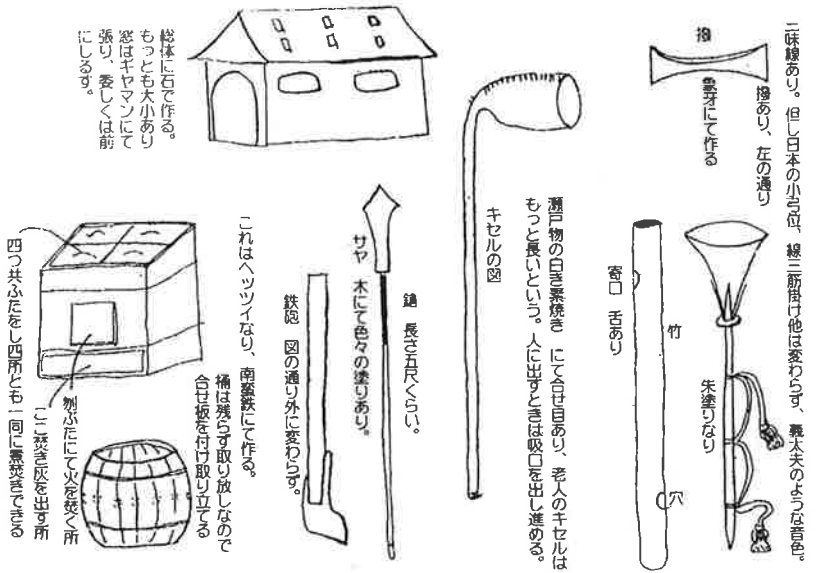
薪は長さ二尺くらいで日本と変わりません。

お茶は甘いほうで色は番茶のようです。その中へ三つ砂糖を入れて吞みます。飴も甘くて、大きさは氷砂糖くらいです。

一、食事は銅盥くらの銀の器に盛っています。台(テーブル)は胸くらの高さのを据え腰掛けてします。飯肴ともこの器に入れて手には持たずに箸(フォーク)で食べます。この器は大小とも後に図があります。

一、私(安五郎)の付添いは三人で、一人はゼキ、もう一人はの名はミイ、もう一人の名はポタンで私をヤリと呼びますがお互いに呼び捨てです。

一、女は素顔で髪は後ろへ下げ一か所綺麗な元結のようなもので結び油をつけ、たいへん美しいです。頭の差物の櫛、こうがい、かんざしは日本と変わらず男よりは花やかな衣類で、少しゆつたりとしています。子供に乳を吞ませる時は脇の処より小はぜをばづし胸



をあけ乳を吞ませます。子供はとて大切にし、外に遊びに出るときは男女のうち一人が必ず付き添います。

又、宿場毎に立派な家があり、遊女町もあり、異国人はあちらの金銀を見せ、これを持って行くと、そこへ行けるという仕ぐさをして笑っていました。

一、草木は日本と少し変わっていますが三月下旬梅、桜同時に開き、花は日本と同じです。

牛馬猪豚鶏鳩、鷹鷲熊犬、そのほか生類何も変わらず、家ごとに伺付書(ポスト?)があり、珍しいのは菅本角があり、三寸くらいです。

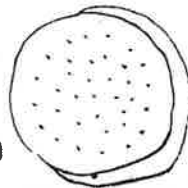
一、雨天の節、傘はなく細材の黒塗り笠冠になめし皮でできた合羽様なのを着ます。尤もこの笠は日傘にも使うそうです。

一、神社仏閣は見当たらず、僧侶もいません。家毎に床の間のような処へギヤマンの灯籠を灯し先祖でも祭っているように見えます。

一、食事は朝六つ時、昼九つ、晩六つ時。尤も市中に鐘楼があつて合図の鐘を聞き、農業の者その外の者も家々に帰り食事します。

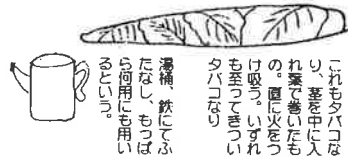
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15					
イ	チ	ニ	ホ	ヘ	ニ	ハ	ニ	ハ	ト	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ					
16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31				
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ				
32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47				
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ				
48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
68	69	70	71	72	73	74	75	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ
88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	100							
ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ	ニ							

左は異国の数字



丸を四く五すくらい厚さ七く八分ほどの糰子なり。うどんの粉を練り固め、火から取り上げたところ、図の通り、ホツホツと穴ができて、味はないので砂糖を付けて食べる。

煙草なり、図のごく練り葉のようなもので葉を何度も練り固め、端より小刀で切り、キセルに詰めて用いる。一服で一兩ほどのめるといふ。



これもタバコなれ、葉を中に入れて蒸で巻いたもの。皿に火をつけ吸う。いづれも至って美味しいタバコなり。

湯桶、鉄にて、たなし、もつぱら何用にも用いるといふ。

風呂風呂や躰たらいの家はなく、家毎に大盥たらいに湯を入れて浴びます。尤も一人ごとに汲み替え（残り湯は使わずに）家中替えてひと盥たらいで済まします。

井戸は深さ一間余りで水は沢山あります。水鉄砲（ポンプ）のような物であると思つて自在に（水が）出てきます。

又、川は流れが清らかで舟も随分往来しております。橋は石垣でもつて（橋の）両方から築き立て、いづれも唐絵の通りで岩いわに鈎かぎを入れたり細を打っています。

一、都合三十日程逗留しそれより四月上旬、以前の船に乗り二十三日程で盛岡（藩）海上へ着き、それから十七八里ほど伝馬に乗つて、譜代村に着岸しました時は四月二十四日でした。

五十日ほど南部領に逗留、六月晦日に盛岡城下を出立、四人とも江戸へ御差出しということになりました。

道中（警護）人数凡そ六十人、士分（主立った者）四人、内漂流人の掛り二十六人、外に役人三十三人程で七月十四日麻布の（盛岡藩）御中屋敷へ着きました。同二十三日、石河土佐守様御役番へ御引渡しになり、その日の七つ時（午後四時）迄、御台様方も御出席、

土佐守様御直々の御吟味がありました。

その後は都合五度、御呼出と御糾明が御座いました。

あとがき

先ず、川合彦充氏による「近世漂流船の漂着先と件数」では帰還者のあつたもので約三十箇所と三百五十件以上もあります。例えば万次郎の「沖ノ島」にはその前十件の漂着例があり、二十年間島で暮らした後生還できなかった例もあります。先述のロシア関連も十件ほどあり、実は更にあつて、万次郎や彦蔵の例はむしろ特殊で安五郎の漂流もあり得ると思われまふ。

また安五郎三年間三度の大航海はほとんど北海道の松前行きが主です。これは当時の各藩が米の年貢経済に行き詰まり、慢性借金状態から脱却しようと苦心している時でした。儒学者太宰春台（一七四六没）の『経済録拾遺』の中で

「今の世は高禄の士大夫も藩主もただ金銀で万事すます必要上、どうしてもこれを手に入れる工夫が必要だが、これには売買が最も近い。現代でも昔から商業（交易）で国費や給与を賄っている国がある。

対馬候は小国で二万石（格式＝十萬石）だが朝鮮人參その他など極安に買入れ高く売り二〇万石の実力あり、松前藩は七千石だが国の土産と蝦夷の貨物を独占して売るゆえ、実質五万石の財力がある。…津和野藩四万石は板紙で十五万石、薩摩は琉球の貨物独占で大いに裕福だ」などと書かれています。

松前藩は創立当初から米の年貢経済が成立しないので時流に乗り、現在でも世界の三大漁場といわれる水産資源をバックに実質貿易独立国として莫大な利益をあげ、薩摩藩は五百万両借金財政立て直しのため利尻の昆布を密貿易に利用したり、松前藩主が幕府の老中に賄賂を贈ったりとか、そのほか話題の多い藩ですが、安五郎が内地の米（アイヌとの交易だとずっと高く売れる）その他の物産品を一七〇〇石積（二二五トン）の船で運ぶのは現在の外国貿易船で働いているようなものだったのでしよう。

因みにわが佐伯藩も「藩史大事典」（雄山閣）によると「…平野部が極端に少なく農業生産力は非常に低い。それをカバーする炭、樵木、紙、干鰯（綿の金肥）などの特産品を移出し米穀を移入するのが特徴で、そのため回

船業などの流通業も大いに発展した。」とあるので安五郎の身の振り方もかなり想像できます。

異國人之言葉之事

鳥	毛	天	冠	當	仲	淺	ヒ	凡
フウス	ヘア	ヘアル	キヤバ	レウリ	ランバ	マヒ	メライ	シボフリ
アイニ	ハア	イエ	レトウケニシ	チハル	レウリ	レイ		

(以下略)